

日本における方言研究の動向と展望

李相揆・岸江信介・瀧口恵子

A Study of the Status and Prospects of Dialect Research in Japan

Lee Sanggyuⁱ Kishie Shinsukeⁱⁱ Takiguchi Keikoⁱⁱⁱ

Abstract

In a recent study in Japan for the main flow of dialect study examined. Nationwide dialect vocabulary and grammar based on research from university laboratories has been a very active research. In the years 2005-2010 more than 200 papers and books have been published.

Linguistic-geography, social dialects, with precision and cultural studies, history, and with adjacent fields of collaborative research and remarkable progress is being made. Discourse grammar of dialects and languages, especially for cartographic research has progressed.

Distribution of the Sino Asia to understand the dialect of the diffusion process to extend the scope of the viscosity is noticeable. Sino's foray letters p, t, k for the corresponding study of geographical distribution, dialectology study will be an opportunity to extend the deduction.

Keywords: neo-dialect, linguistics map, real time, glottogram, Illustrator

ⁱ 慶北大学国語国文学科教授

Professor, Korean Language and Literature, Kyungpook National University

ⁱⁱ 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授

Professor, Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima

ⁱⁱⁱ 啓明短期大学社会福祉相談科教授

Professor, Social Welfare and Counseling, Keimyung College

1. はじめに

日本における方言研究は、国立国語研究所をはじめとして、大学の研究機関に所属する研究者を中心に行われている。日本の方言の研究は、これまでの基本的な調査をもとにさらに進展する傾向を見せており、研究領域の拡大はもちろん、研究方法や研究技術の精密度も高くなっている。語彙・音韻・文法等の地理的分布については、国で行った調査結果を活用しながら、さまざまな言語地図を援用し、同時に言語地理学的研究と相俟って社会言語学的研究の基盤も固めつつある。2005年を前後して、方言談話、方言と民俗、言語景観に関する研究、方言と教育等、学際的研究へと拡大し、方言研究に質的な変化の傾向が窺える。

国で行った主要な方言調査プロジェクトとして、『日本言語地図』(全6巻)が1966年から始まって1974年度に全巻を刊行、『方言文法全国地図』(1.調査編、2.活用編(1)、3.活用編(2)、4.表現文法(1)、5.表現文法(2))が1989年から始まって2002年に全巻の刊行を終えた。一方、国立国語研究所では、1978年から2002年の間に『方言談話資料』(13巻)を資料集と共にデータベース化し、これを普及させた。これら方言の基礎資料作成準備作業として、方言の語彙調査や文法調査の方法、そしてアンケート調査用紙の作り方についても細かく研究が行われたので、資料の信頼性が非常に高いだけでなく、資料の質や量的な面においても十分に世界的なレベルだと言える。

1950年に『八丈島の言語調査』から出発した社会言語学的研究も、『敬語と敬語意識』(1957)、『敬語と敬語意識—岡崎における20年前との比較—』(1983)、『共通語化の過程』(1965)、『待遇表現の実態』(1971)、『大都市の言語生活』(1981)、『談話行動の諸相』(1987)、『学校の中の敬語Ⅰ』(2002)、『学校の中の敬語Ⅱ』(2008)等、さまざまな方面で幅広い研究が進められてきた。地理言語学的な分布との関連性を十分に踏まえ、世代別、性別、学力等を考慮に入れた社会方言学的な分化の姿に迫っている。

日本方言研究会の統計資料によると、2005～2010年の間に方言関連の研究は、論文と著書を合わせて1,627件であった。他に、各地大学での方言研究室で行われる研究も活発である。例えば、新潟県立大学福嶋秩子氏の「言語地理学のへや」では、SEALによる地図作成のためのソフトウェアを提供しており、甲南大学都築直也氏の

方言研究会、群馬県立女子大学高橋顕志氏の「Ken's Linguistic Atlas」、関西大学日高水穂氏の「でんでん〜伝々〜」、長岡技術科学大山本和英氏の「ふるさとの方言」、明星大学柴田雅生氏の「全国方言地図の項目対照表」、琉球大学付属図書館と沖縄言語研究センターによる「琉球語音声データベース(DB)」、国立国語研究所大西拓一郎氏の「方言の宇宙」等では、インターネット上で研究成果の公開を行っている。

日本の方言研究の特徴は、当該の研究分野の専門家が多いということである。そのため、方言研究のテーマが豊富であり、これまで多くの研究成果を蓄積してきた。方言を専門分野とする研究者の数が十分に確保できているのは、日本語の研究のなかで方言研究の意義が重要視され、その研究の必要性が高く位置づけられているからにほかならない。日本での方言に対する認識は、日本国内部での言語の分化と統合という両面から方言を扱おうとする意図が窺える。換言するなら、日本語諸方言の成立をめぐってその言語変化のありようを柔軟に扱おうとする態度のもとに日本語としての統合的レベルで、琉球諸方言など異質的な要素を多く有する方言の多様性を重要視している点は特徴的である。

明治維新以降、東京山の手地域の言葉が土台となり、戦後、全国各地で共通語化が急速に進んだ。この実態を常に観察し続けてきたのは、おもに日本の方言研究者達であった。日本語学分野において方言研究が幅広いテーマを展開させ、それぞれ奥深い研究成果を挙げているといえよう。

方言研究が日本の言語分化研究の一部だという認識が広まり、それが日本の方言研究領域にバリエーションを生む基盤となっているのである。例えば、日本の方言研究が対象とする領域は真田信治氏編集による『展望現代の方言』(2002)からも容易に知ることができる。方言と標準語の広がりや共通語からの離脱関係、方言の音声変化とアクセントの変化、方言の語彙分布と新方言(neo-dialect)、方言と共通語との関係、方言文法の地理的分布、方言地図と方言研究、方言談話の特徴と分布のような、方言の音声、音韻、文法、語彙の変化についての研究が中核的な領域を成している。研究の方法論においても、言語地理学と社会言語学との研究方法を相互に援用しつつ、特に都市方言の位相と方言拡散の推移等、非常に広角な視点からの研究が行われている。また、方言と放送、方言と演劇、方言と口承文学、方言と教育問題等、学際間の研究領域も広げている。

研究方法の技法的な側面においても、方言資料の収集と整理、そして言語地図作成方法等、日進月歩、その進化の跡が窺える。コンピュータを活用したデータの構築と管理、言語地図作成に至るまで、電算化の成果には目を見張るものがある。バリエーション豊かな言語地図作成システムが開発され、これらを利用した、方言資料のデータベース化など、電算処理による技術発展も目覚しい。

社会言語学的側面における方言地図の方法は、込み入った地域で細かく分かれた層を記録対象とするため、フィールドワークではなく携帯電話を利用した調査が試みられ、また、集めた大量の資料をデータベース化する技法もさまざまである。^{iv} 言語地図作成は、研究者らが個人的に開発した言語地図作成システムが幾つかある。特にパソコンを活用した言語地図作成では、荻野綱男氏、前川喜久雄氏、福嶋秩子氏、高橋顕志氏、田原広史氏、川内秀樹氏、大西拓一郎氏、中井精一氏、岸江信介、そして日本国立国語研究所の『日本語地図』と『方言文法全国地図』の電算化技術は、世界最高レベルと言っても過言ではないと思われる。

橋本萬太郎氏『言語類型地理論』(1978)、余霽芹・遠藤光曉編『橋本萬太郎紀念中国語学論集』(1997)による、先駆的研究の成果は、方言研究の対象地域が、日本を越えて中国を含めた東アジア全域に拡大している点で特徴的である。東アジア地域の言語分布、中でも漢字音の地理的分布についての研究と広域地図作成に目を向けており、言語地図も平面地図から「立体的な言語地図」や「動態言語地図」等に関する研究へと展開しつつある。

日本における方言研究の特徴は、研究対象地域と調査の精密性、そしてその資料を効率的に電算化から言語地図作成に至る過程が非常に精緻である点である。また、研究方法においても言語地理学的方法と社会方言的な方法とを連携させようとする、非常に独特な方法を発展させている。

ただし、異質的な言語だったアイヌ語を日本の方言研究ではどう位置づけるのか、異言語という点で方言研究では扱わず、放置された感がある。アイヌ語にも方言があり、日本の方言研究の中でアイヌ語の諸方言も取り上げるべきではなかった

^{iv} 中井精一(2005) 社会言語学の調査と研究の技法(おうふう)、参照。

のかという問題が残される。また、日本の方言研究は、方言学自体が開花し、おもに国語史の補佐的な存在という訳ではないところが韓国とは異なる点だと言えよう。

2. 本論

2. 1 日本における方言研究の概要

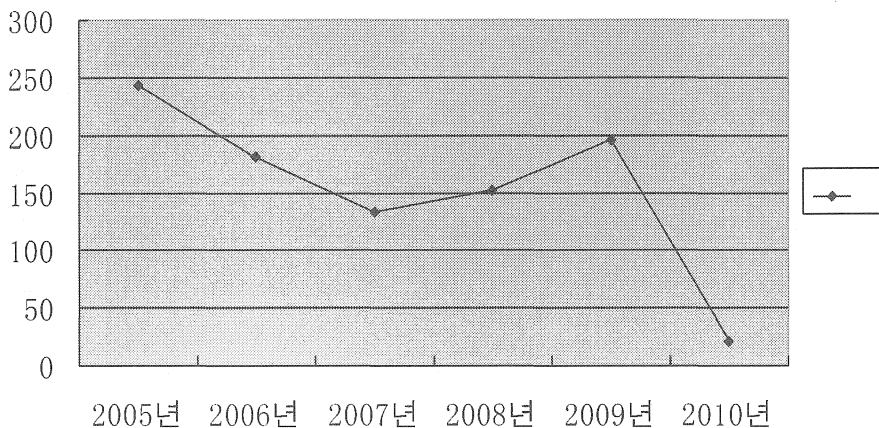
日本の方言研究は、国立国語研究所や大学、そして日本各地の在野の研究者達が主導してきた。特に大きな研究課題は、主に国家がサポートし、これに足並みを揃えて大学の研究所や研究者たちが個別調査にもとづき、個々の研究を実践してきた。以下では、最近の方言研究の動向を中心に見てみたい。

日本全国を対象とした方言全国調査が始まったのは、明治時代の国語調査委員会が最初であったが、それ以後、1948年に国立国語研究所が創設され、全国規模の方言調査を企画・実践し、日本の方言研究を牽引してきた。国立国語研究所はまさに国家的なプロジェクトとして、『日本言語地図』(1966~1974)、『日本言語地図語形索引』(1980)、『方言文法全国地図』(1989~2006)、『方言談話資料』(1975~1981)等、他にも各種方言関連の基礎調査についての報告書等が多数ある。

『方言文法全国地図』は、1979~1982年の間に全国807地点を対象とし、方言研究者93人が267項目を高年齢層の男性に対し、直接インタビューした調査結果を、全6巻(平均50面の言語地図含)、カラー(6色)で印刷した豪華版言語地図である。この地図の発刊だけでなく、日本では敬語法をはじめとする文法形式の方言分布についての研究も活発に行われている。

『日本言語地図』は、全国の方言語形の地理的分布を明らかにすることと、標準語の地理的背景を探るため、全国2,400地点において高齢者男性を対象に行った調査結果である。『方言談話資料』は、1978年から1987年の間に、全国各地の自然談話を場面別の談話資料として文字化資料とCDにまとめたものである。このような国家プロジェクトの成果は、方言語彙、文法、談話研究の振興に大きく貢献し、大学の研究者たちの研究に活用されており、方言研究に幅と深みを増大させたということができよう。韓国でも全国レベルで方言調査を2回ほど行ったが、方言文法調査のような持続的な研究が今後実現できればと願うばかりである。

日本方言研究会が公開した論著、データベース(1999～2010)の論著目録は計1,674本に及ぶ。その中で、次の<表 1>は2005年から2010年の間に発表された論書の推移を示したものである。



<表 1> 2006年から2010年までの論著発表数

2005年には243件、2006年には181件、2007年には134件、2008年には152件、2009年には195件、2010年には21件となっている。韓国とは異なり、毎年、方言研究関連の論著が相当数出ていることが確認できる。2010年のデータは、資料収集が年度途中で十分でなかったためこのような件数となっている。

真田信治氏が主宰する「地域言語研究会」では、1989年から最近まで学会誌『地域言語』を中心に主に京阪方言に関する研究を集中的に発表している。

日本方言研究会で刊行した、方言研究を展望する『21世紀の方言学』¹⁾で、日本語の意義の現在と未来を詳しく述べている。この本では、これまでの方言研究を振り返りながら記述の方法論、比較方言学、方言地理学、社会方言学、方言区画について理論的に強化することの必要性を強調している。主な内容として、「記述方言学」を上

¹⁾日本方言研究会編(2002)『21世紀の方言学』図書刊行会参照。

野善道氏、「比較方言学」を木部暢子氏、「方言地理学」を加藤和夫氏、「社会方言学」を真田信治氏と武田圭子氏、「方言区画論」を井上史雄氏が回顧し、今後の展望について論じている。井上氏は、標準語化の進行について多次元尺度構成法(MDS)を用いて標準語の広まる過程をクラスター化し、言語空間に表しているが、研究の増加等、社会的要因を言語地理学的な分布で実現させている。^{vi}

方言学研究の新たなパラダイムとして、学際的な研究の必要性を主張する大西拓一郎氏は、方言学は民俗学や社会学等、文化的な面で連携が必要だと強調しており^{vii}、同じく中井精一氏も、村落社会が崩壊しつつある日本で、民俗学と方言学を結び付けた研究の必要性を強調している。つまり、日本各地の食文化と方言の分布との関係や、村落の文化と方言との関係等を究明しようという学際間の研究である。^{viii} これらの主張のなかで、方言学は人間学と密接な関係の中で研究されるべきであると強調する江端義夫氏の論考は、注目すべきテーマを投げかけている。方言学の社会的貢献が必要だという観点から、国語政策と方言学の関係、学校教育での方言学の役割、ひいては、医療福祉と方言学との関連性を強調することによって、方言学研究の外延を広げてようとしている。最近、言語景観と関連付けた方言研究が行われている点も、こういった、方言研究を学際的にとらえていこうという動きと深い関係があるとみられる。

福井玲氏の、アクセントの方言差^{ix}、若者世代の方言差、言語行動と方言学の関係、そして、沖裕子氏の談話方言に関する研究は、方言研究のテーマを拡大させ、さらに前進させようとする動きが感じられる。沖氏は、談話形態論の分析単位による談話構成要素が、日本の東西の話し手と聞き手との間で異なる点を指摘し、この差が談話にも現れるという認識を示している。^x 方言と関連のある談話研究は、文語と口語の不一致という問題に体系的にアプローチする方法が取られているからである。

方言研究の情報化に対する関心も高まっている。高橋顕志氏の「情報化時代の方言研究」では、方言資料の処理や、言語地図作成の機械化について議論を提供し、田原広史

^{vi} 井上史雄(2002)「方言区画の再生」, 21世紀の方言学(図書刊行会)参照。

^{vii} 大西拓一郎(2002)「方言学の学際的性格」, 21世紀の方言学(図書刊行会)参照。

^{viii} 中井精一(2002)「民俗学から方言学へ」, 21世紀の方言学(図書刊行会)参照。

^{ix} 福井玲(2000) 韓国語アクセント論叢(東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設 東洋諸民族言語文化部門)参照。

^x 沖裕子(2003) 日本談話論(和泉書院)参照。

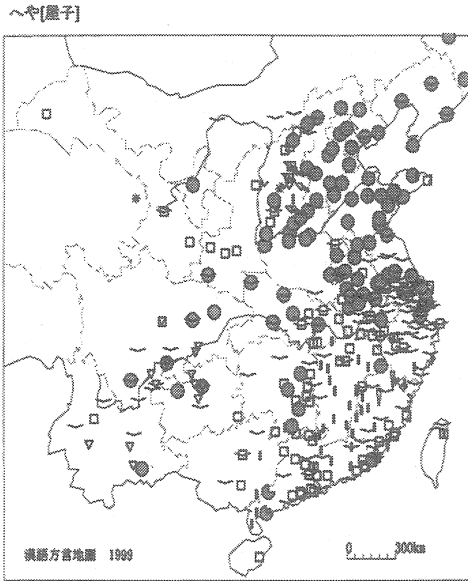
氏は「コンピュータと方言研究」で、方言の調査データを保存する方法として、エクセルやデータベースソフトを活用した言語地図作成について、展望を論じている。^{xi}

日本国内では、それぞれの地域で方言研究が非常に活発化している。前述のように、大学の研究所や個人の研究室という単位で、北海道、東北、関東、中部、北陸、近畿、中国、四国、九州、沖縄の各地方で方言地図を作成し、方言分布の解明を行うため、活発に研究がなされている。このように地域研究が活性化することで、各地での方言圏毎の研究も集積化している。21世紀を臨む方言研究の未来について、消滅に瀕する、生業語彙調査の必要性や方言接触による研究、都市と集落の方言の問題、言語活動としての方言の特性、認知方言学と談話方言研究の方法と必要性についての論議が提起されている。

また、日本の方言研究の主要な観点の一つとして、方言研究の対象を日本国内に限らず、中国、韓国、ベトナム等、漢字文化圏での漢字音の分化や対応関係を明らかにしようという動きが挙げられる。遠藤光暁氏の『中国における言語地理と人文自然地理(1~5)』(1998~1999)では、中国の方言の差異を明らかにするため、言語地理学的方法を利用し、方言の側面から漢字音の分布、例えば入声字の影響や、声母と韻母との対応関係をテーマとする研究を行っている。遠藤氏は、中国の方言の分布を言語地図に描き、共時的な観点から日本語と中国語における語彙対応の関係に目をむけるだけでなく、入声字の対応関係や声母の対応関係を究明しようと力を注いでいる。

〈図 1〉は、「へや」を意味する方言形が、中国でどのような分布を見せているかを示した言語地図である。東アジアの漢字圏国家の間で漢字語彙の分布をマクロ的にとらえようとする努力は、相互間の文化影響力を測定する際に大きな力となるだろう。更に、声母と韻母の対応をはじめ、そのバリエーションと変化過程を究明することは、非常に興味深い研究課題でもある。中国を中心に、モンゴル、満州、女真、韓国、日本、ベトナム等の地域の漢字語彙の地理的分布から漢字音の変化や歴史的推移を研究することは、アジア漢字文化圏の国々が共有する、未来の方言学研究の主な課題の一つである。

^{xi} 高橋顕志(2002)、田原宏史(2002)、21世紀の方言学(図書刊行会)参照。



- | | |
|------|-------|
| □ 房 | ▽ 房離 |
| ● 塵 | ↓ 塵間 |
| ◇ 簞 | ⊙ 塵房 |
| ┆ 間 | ㄨ 家 |
| ～ 房間 | ∨ k-舎 |
| へ 間房 | * その他 |

< 図 1 > 遠藤光暁氏「中国における言語地理と人文・
自然地理(5) 漢語方言地図集 第3集」

2. 2 領域別日本方言研究の流れ

1) 言語地理学研究

言語地理学研究は、柳田国男氏が『蝸牛考』(1930)で方言周囲論を論じて以来、本格的に動き出したといつて過言ではない。柴田武氏、徳川宗賢氏、グロータース氏、馬瀬良雄氏による新潟県糸魚川地域の調査は、小地域を対象とした、日本で最初の言語地理学的研究である。柴田氏は「言語地理学の方法」(1969)を公開し、「隣接分布の法則」、「周辺分布の法則」等、方言の地理的分布パターンの法則を説き、地方における言

語史の再構成といった言語地理学の目的を掲げた。このような言語地理学の方法論は、方言の分布と生成をモデル化した言語層位論に基づいた「方言圏論」へと発展した。馬瀬(1992)、大西(2011)は、言語が都を中心として順次的に拡大していくという方言圏論を、新たなモデルに適応させている。方言の広がりには連続的な伝播でありつつも、隣接した言語共同体の集団を形成し、飛び越して広がることもあるという理論へと発展してきた。

このような理論が導かれた背景には、年齢別の調査結果を実時間上で比較し、言語変化の過程を分析する方法論が確立していたからである。例えば、真田(1976, 1978)によって行われた富山県庄川地域を対象にした調査結果は、40年後、大西(2011)により、方言が多元的に発生していることが見出された。40年前に分布していた「チョーチン」は消え、「トーロー」と「フーリン」が現れる理由を、利賀川流域で伝播したこと、つまり、東京を中心とした共通語形式は拡大せず、隣接大都市の影響をそれ以上に強く受けているという点を確認したのである。

岸江・二階堂(2005)は、宮崎県の確認要求表現「～んじゃない」が「～こっせん」形に若い層から少しずつ増える傾向にあることを確認した。松丸真大氏は、富山県で勧誘表現の「いくまい」、「いこまい」、「いかんまい」の分布を通して、古い形「いこまい」が徐々に弱化して新形「いかんまい」が広まりつつあることを明らかにした。^{xii} このような研究が可能なのは、既に国家的課題として行われてきた『方言文法全国地図』(1989～2006)があるからである。韓国でも「方言文法全国地図」作成のため国家的研究課題を立ち上げて、中長期的な計画にもとづいた調査の必要性を強調しておきたい。過去に収集した方言資料と、現在の方言を比較することにより新たな研究を進展させることができるからである。このような方法論は、韓国でも、小倉進平氏の朝鮮語方言資料と、1980年代の韓国学中央研究員によって収集された方言資料を対比させれば、方言の変遷の研究を行う方法論的な基盤となるであろう。例えば、1980年代、韓国精神文化研究員で調査した結果を現在の観点で比較するなら、方言分布がどのように変わったかを追跡することも可能となろう。このような動態的な観点から方言分布と社会階層的变化に対する言語の多様性に関するモデルを提示する必要がある。

^{xii} 松丸真大(2011)「富山県における慣用表現の伝播」、韓国文学言語学会・慶北大学校地域言語研究会、発表冊子参照。

言語変化は、人口の移動や拠点都市の拡大など社会的要因とも密接に関わっている。いわゆる都市部で発生した新方言がどのように広まるかについてのメカニズムを見出すため、人口や移動に関する計量的情報を利用することで、方法論上、方言地理学と社会言語学の統合する傾向がみられる。^{xiii} 中井精一氏を中心に、敬語表現の地理的分布についてグロットグラムの手法を用い、地理×世代といった視点から敬語形式の分布の比較研究が行われたことがある。敬語形式の変化過程を説明することにより、地域方言の空間的分布を世代別の違いとして、変化の過程、即ち通時的省察をしようという動きも出てきている。^{xiv} 言語地理学的方法と社会言語学的方法とを統合して、言語の通時的な視点から言語変化を追求しようとする試みである。この研究の調査方法は非常にユニークである。新潟県、富山県、石川県、福井県、滋賀県、京都府に至るまで、鉄道駅を中心に年齢別の膨大な思慮をデータベースに蓄積してから、これを地図上で示し、敬語法の変化過程を追跡している。

言語地理学の研究方法を社会言語学の研究方法と結びつけた研究としては、中でも、岸江信介の成果が挙げられる。年齢別にアンケート調査や通信調査を行い、その調査結果で近畿地域から四国地域の言語伝播を記述している。近畿地域の中心地である京都で活発に使用されていた否定表現がなくなってしまったが、四国では今も残存していることを確認している。

日本でも伝統的な村落が崩壊し、地理的な方言差がだんだん共通語に統一されてしまい、地理的な違いがなくなりつつあるなか、言語地理学の研究が1900年代を起点に鈍化し始めた。しかし、言語地理学研究の新しい活路を見出す力も現れ始めた。加藤和夫氏は、方言地理学はこれから新たな地域の違いを発見し、これまでの方言資料を比較して、また新しい解釈をしようとする努力に発展してゆかねばならないと主張している。^{xv} 一方、言語地理学の研究が、GISなどコンピュータ上のソフトを活用してより精密な言語地理的分布と変化の方向を見出し、動態的な言語変移の流れを観察する方向へ発展させようというビジョンも提示されている。^{xvi}

^{xiii} 井上史雄(1985) 新しい日本語—〈新方言〉の分布と変化(明治書院)参照。

^{xiv} 中井精一(2011)「日本語敬語の地域性と都市性」、韓国文学言語学会・慶北大学校地域言語研究会、発表冊子参照。

^{xv} 加藤和夫(2002)「方言地理学の再生」、21世紀の方言学(図書刊行会)参照。

^{xvi} 大西拓一郎(2006)「言語地理学の再起動」、日本のフィールド言語学(桂書房)参照。

2) 社会言語学

日本での社会言語学は、性別、人種、学力、社会的地位等のような社会言語学的な言語変異を引き起こす可能性のある要因と言語のバリエーションとの関係を究明する西欧とはやや異なり、「言語生活」といった視点から研究が始まったといわれている。また、同時に方言学とともに並行して進められ、地域言語の研究者の多くが社会言語学にも同時に進められてきたといつてよい。例えば、方言の世代差にみられる言語変異を分析するため、社会言学的手法が用いられている。

なお、社会言語学的調査での資料方法として、「参加観察」による方法や「自然観察」法のほか、「質問調査法」や「通信調査法」等が考えられる。^{xvii} 日本の社会言語学の特徴的な傾向として、大量のデータを定量分析する方法が採られることが多い。大量の情報を収集し、これを言語地図と計量的分析を通して方言の変化推移を解明する方向へと進めている。

他方、東京標準語による全国各地での共通語化の浸透状況にも関心がもたれてきた。井上史雄氏は、方言研究が山間僻地の言語だけを対象にするのではなく、都市民らの言語と若者層の言語が新しい方言、即ち新方言という観点から研究する必要があると主張している。新方言研究は、社会方言学的な観点から地域差や年齢差の比較から東京共通語の広がりや計量的に分析する方法も大変詳しく記述している。^{xviii} また、世代間での共通語使用頻度の違いを計量化することで、年齢別共通語の拡大推移を明らかにすると同時に共通語に対応する新しい方言がどのように作られるのかを究明することが目的としている。共通語化に伴う方言区画を多変量解析や重心法という手法を用いて方言区画を試み、共通語の語彙や文法の広がりやの程度を計量的に推定している。

3) 方言談話研究

日本国立国語研究所では、1987年から2002年の間に、「方言談話資料(13巻)」が資料集とCDでデータベースを製作して普及するに至った。この調査事業をきっかけに、談話に関する研究が活性化し、談話構成の単位である文節から、結節という分析単位

^{xvii} 나카이 세이치 엮음/이상규·이순형·김경숙 옮김(2005) 사회언어학적 조사와 연구 방법 (이회)参照。

^{xviii} 井上史雄(2001) 計量的方言区画(明治書院)参照。

が提案され、談話と文法的単位を別にしてしている。これは、自然言語処理においても、連語のような談話単位の結節に関する研究が行える基盤を提供している。例えば、日本の談話論の理論的体系を築いた沖裕子氏は、談話構造の地理的バリエーション冠する研究と日本の東西方言での談話の違いについての研究を発表し、また、井上文子・三井はるみ両氏は、方言談話の結節に現れる感嘆詞と間投助詞が、方言によってどう異なるのかを論じている。^{xix} このように、方言談話研究が地理言語学的研究の新たな道を切り開いている。

4) 東アジア方言研究

日本方言学では、東アジア地域が既に研究視野に入っている。橋本萬太郎『言語類型論』(1978)から始まった漢字文化圏の方言比較は、言語類型論から中国方言についての独自の調査、方言地図作成へと拡大している。橋本(1999・2000)の研究^{xx}で提示された「江」と「河」の分布は、黄河と揚子江を中心に、はっきりと方言を区別する根拠を見つけ出した。これに基づいて安部清哉氏は、揚子江を中心にモンスーン気候帯と方言の違いを確認する論文を発表した。^{xxi}

言語の統語構造、即ち修飾語のタイプによる言語類型学的分布を、峰岸真琴氏は言語地理学類型論的な研究での必要性を提起した。^{xxii} 漢字文化圏での漢字音分布に関する研究は、極めて重要な研究課題である。声母の分化や入声子の消滅と維持という方言差を研究すれば、漢字音の広がりと変化過程を説明するための重要なヒントが得られるだろう。このような観点から西田龍雄氏は、アジア圏にあるさまざまな国の方言研究を試みている。亀山大輔氏の「朝鮮半島における方言の分布について」では、小倉進平の資料に基づいて方言区画や朝鮮の方言分布について論じている。

すでに述べたように、今後、漢字文化圏に属する日本、韓国、ベトナム、満州ツングース、モンゴルの漢字音に関する方言地理的分布研究を行うことが、非常に重要な研究課題の一つである。中国漢字音の改新が、結果として隣接国や諸民族の言語にど

^{xix} 井上文子・三井はるみ(2006)「方言談話の中の地域差・世代差・場面差」, 日本フィールドの言語学(桂書房)参照。

^{xx} 橋本萬太郎(1999-2000)『橋本萬太郎著作集全3巻』(内山書店)参照。

^{xxi} 安部清哉(2004)「言語地理学と日本語とアジア・環太平洋言語史」, 日本語学(明治書院)参照。

^{xxii} 峰岸真琴(2004)「言語の類型とその分布」, 日本語学(明治書院)参照。

う反映しているのか、アジア圏の言語分布研究が進められねばならない。中国の呉方言を始め、韓国やベトナム、そして満州ツングースの一部の地域では入声字 [p, t, k] が残っており、声母の対応体型を確認するためにも、漢字音の方言分布研究がこれから実現することを願ってやまない。

5) 方言の学際的研究

大西拓一郎氏は、方言学研究が隣接学問との学際的研究が必要であることを主張し、民俗学、歴史学、地理学等の学際的研究のためには隣接科学についての理解と研究目的を明確にせねばならないと述べている。

日本で方言研究の領域が広まっていることを示す研究として、中井(2006)^{xxiii}では、奈良地方の食物と関連のある語彙と環境の相関関係、そして文化的景観と方言使用の関連性について記述しているが、方言研究が文化や民族、歴史と連携した地域文化研究の媒体となると捉えている。天理大学文学部編(2006)『山辺の歴史と文化』は、日本の方言が地域の歴史と文化との複合的かつ多角的な関係を説明するにふさわしい、学際的研究を示す好例として挙げることができる。このような学界の動きは、『日本海総合研究プロジェクト研究報告書4・5』(2010・2011)でもよく表れている。中井精一氏の「日本海沿岸地域の自然環境と言語」、北陸地方の資料に基づいて行った中村大氏の「縄文祭祀研究におけるスケール概念の有効性」では、石器の分布や縄文字、祭祀と方言分布との関係を論じている。^{xxiv}

ダニエル・ロング氏の「奄美ことばの言語景観」を始め^{xxv}、最近では春田直紀氏が編纂した「菊池川流の景観史研究」^{xxvi}、中井・ダニエル両氏が編纂した『世界の言語景観 日本の言語景観』^{xxvii}等の研究が進められている。都市にある立て看板の実態を分析し、景観に適切な文字開発等、言語を使った実用的な研究も進められている。

GIS を活用した言語地図作成とデータベース構築についての研究としては、富山大学人文学部のGIS研究会で人文科学研究と、ひいては言語地図作成の研究の有用性や

^{xxiii} 真田信治監修(2006)「景観・感性・言語」(中井精一執筆)参照。

^{xxiv} 中山純蔵・中井精一・中村大編(2010)『東アジア内海の環境と文化』(桂書房)参照。

^{xxv} 中山純蔵・中井精一・中村大編(2010)『東アジア内海の環境と文化』(桂書房)参照。

^{xxvi} 春田直紀(2011)『菊池川流の景観史研究』, 総合地球環境研究所研究成果報告書参照。

^{xxvii} 中井精一・ダニエル ロング(2011) 世界の言語景観 日本の言語景観(桂書房)参照。

その活用方案についての研究が始まり、言語や方言資料のデータベース構築やこれを利用した言語地理的分布の地図作成技術を高度化させている。^{xxviii}

谷謙二氏によって開発された GIS プログラムの MANDARA は、地理情報システムを利用した地理学などをはじめとする人文系諸領域の研究のみならず、言語地理学や社会方言的研究への活用が進められている。大西拓一郎氏の「方言学と GIS」(http://www2.ninjal.ac.jp/takoni/GISME/dialectology_and_GIS.pdf#search= '方言学と GIS') では、GIS による言語距離測定法を通して方言分化の要因を模索し、MANDARA の活用方案を紹介し、2 次的言語地図から 3 次的な、つまり動態的な言語地図への発展の可能性を示唆している。

2. 3 日本の方言資料と言語地図作成の現況

言語の地理的分布を明らかにし、それによって方言境界を見つけ、その境界がなぜ生まれ、それが歴史的にどのような意味をもつのかを明らかにすることが方言学徒の課題の一つである。方言地図を、そしてそれを解釈するためには、まず精密かつ正確な言語資料を収集しなければならない。次にその資料を分類、整理し、次の段階としてそれを地図に描写し、言語の地理的分布を一目で鳥瞰できるように精密な方言地図を描く必要がある。また、方言境界を確認し、体系的な意味付けを行い、空間的分布と時間的な変化との関係について説明することが重要である。

言語(以下、「ことば」を意味する概念でも用いる)と関係のある地図は、言語地図(linguistic map)と方言地図(dialect map)とに大別できる。前者は、一つ以上の言語を対象として扱う場合であり、後者は一つの言語を対象にする場合を言う。しかし、これら二つを厳密に区別している訳ではない。

本稿では厳密に、言語地図と方言地図の概念を区分して使用しない。言語を扱い、地図を電算化する方法を考察することが本稿の目的であり、完成した地図電算化システムはこの 2 つ共を処理できるからである。

言語の地理的分布の把握をまず目標とする言語地理学では、収集された資料を分析、解釈することがなによりも大切である。言語の歴史や共時的な言語体系を明らかにす

^{xxviii} 富山大学人文学部 GIS 研究会(2003) 『人文科学と GIS』(富山大学人文学部)参照。

るためには、言語形式が地域的にどのように分化し、言語のバリエーションがなぜ生じたかを説明するためには、何よりも言語資料の収集を優先させなければならない。地点毎の調査結果を地図にプロットし、言語地図が完成すれば地理的な分布が明らかとなろう。その結果、地理的なバリエーションの把握と言語変化の要因を推定することができるのである。言語地図は、方言学で開発された手法だが、最近では社会言語学的研究を目的とする場合にも広く活用されている。

言語は時間や空間の差異だけではなく、年齢や性別等のような社会的な要因によっても分化する。そのため、社会的要因を考慮した差異を言語地図上に描き出すことができれば言語のバリエーションに対する解釈と言語変化の過程を説明するのにたいへん有効となる。今や言語地図の方法を、地理言語学で独占することはできなくなった。その代表的な事例として Tsunao Ogino(1975)が開発した GLAPS(詳細は後述する)は、言語地理学の分野だけではなく、社会言語学者の間でも広く利用されてきた。^{xxix} また、グロットグラムで社会言語学的変化の過程を3次元の言語地図で描いた高橋(2002b)「ボーリング言語地図」(後述)も、言語地理学と社会方言学を繋ぐ役割を果たしている。GLAPS はマイクロスケールで言語地図を作成するが、このような言語地図はカートグラフィックの形式を利用して、クラスターマップ、グリッドマップ、コンティニュームマップ等の様式で描くので、必ずしも2次元的地図図面上に表現するという制約を受けない。

日本以外にも、地図図面上で河川や山脈等、様々な自然地理的条件を描いた上に、言語分布を描く3次元地形図(Topography)もあった(Jhon Ambrose:1980)。また、今後GISを用いた言語地図では、空間を合成したり、未来と過去の空間をシュミレーションしたりする等、3次元で仮想の言語地理的環境を演出する方向へと発展するものと思われる。現在、2次元でも4次元でも、地図上の言語、又は方言形を描く方法も生き生きした資料の方言形、或いはこれを記号、数字、色等に変えて書き込んでいた方法からインフォーマントの音声資料も一緒に表示する方法へと進歩している。今ま

^{xxix} Tsunao Ogino(1984) 'Computer-assisted Analysis of Field Survey Data, -GLAPS and it's Application-', Quantitative Linguistics, Vol. 2, DIALECTOLOGY, edited by H. Goebel. 参照。

のように言語地図で言語地理学の観点が強調され、言語地図がまるで言語地理学の占有物であるかのようにとらえる時代はもう終わったのである。

言語地図は「ある地域内に現れる言語的な推移が一目瞭然で分かるように、地図という形を借りて表示したもの」(『(韓国)方言学辞典(태학사)』2001:265)のように、単純に2次的な地図形式で言語の違いを表すのではなく、地図や図面、又は3次元以上の空間に、言語的な特質を盛り込んで書き入れることを意味するようになる。つまり、従来の、「言語地理学の方法によって正確なデータを収集、これを効率的に整理し、言語地図を描くことにより言語境界を見出すことを目的とする。あるいは、言語の体系的分化過程と歴史の変遷過程を説明することを目的とする」といった狭義の概念ではなく、言語の時間と地理空間の中で、社会的要因や人文地理学的な要因によって分化した姿を地図に描き出すというように理解しなければならない。このような地図を何枚も綴ったものを地図集というが、特に区別せずに、一般的には言語地図と呼んでいる。

日本では、明治時代から国語調査委員会を作り、「音韻分布調査」(1905)、「口語法分布図」(1906)等の報告書を発刊し、早くから西欧の言語地理学と足並みを揃えてきたといつてよい。言語地図作成の方法と技術は世界的なレベルと評価されている。

草創期の言語地図は、地図上に方言の形を書き込んだものや、記号(はんこ)を作って一つ一つ手で調査地点の上に押してゆく方法で作成された。ところが現在では、コンピュータ技術の発達に伴い、方言資料のデータ構築から言語地図作成まで、あらゆる過程で電算化される段階に発展した。しかも、電算化された言語地図の上に、音声データまで提供できるレベルにまで達した。音声コーパスに比べれば、検索機能がぐっと落ちてしまうが、可視的な機能は比較的進んでいる。

日本には国立国語研究所で1966年に刊行した『日本言語地図』全6巻と、1989年に始まって2005年に完成した『方言文法全国地図』事業で電算化技術を蓄積し、「方言文法全国地図」第5巻からは、全面的な電算化システムを作り上げた。現在、日本の言語地図に関する電算化技術は、世界最高と言っても過言ではなく、国立国語研究所のホームページに公開されている数多くの大学研究室等の言語地図化作業の成果は刮目に値する。言語地図の研究成果だけでも約400件に上る。

日本国立国語研究所の『方言文法全国地図(GAJ)』の5巻から活用している電算化システム(LMS)は、Adobeのイラストレーターにアドインソフトとして組み込んだものである。これは、白地図上に方言形をはんこ(色、何かの形、矢印、補助記号等)に変えた、透明シートの役割をするレイヤーを何枚も重ねて作る方法である。

一方、各大学の個人研究者たちが個別で開発した言語地図作図システムも色々ある。特に、パソコンを使った言語地図作成は、日本では徳川宗賢氏のものを皮切りにこれまで荻野綱男氏、前川喜久雄氏、福島秩子氏、高橋顕志氏、田原広史氏、河内秀樹氏、岸江信介等によるものがある。^{xxx}

1) グラップス (GLAPS)

日本で進められてきた代表的な言語地図作成の電算化方法を見てみると、以下のようになっている。

荻野綱男氏は70年代にGLAPS(Tokugawa1993, Ogino1994)というパッケージプログラムを開発し、言語地図化作業に活用した。GLAPSは言語地理学と社会言語学の資料を同時に処理できるプログラムへと発展した。

GLAPSは、スタンフォード大学で開発したSPSS(Statistical Package for the Social Science)と似ている。GLAPSは、日本産業基準(JIS)レベル7000、フォートランで作成されており、その最大レベル(ILSO Full)フォートランや、ASAフォートランで標準化のために国際組織で認定した、ドラフトフォートランを備えている。アセンブリ言語を使っていないが、事実上GLAPSは変換装置なしで他のコンピュータに駆動できる。GLAPSの表現方法は、クロステーブル形式で、縦横80カラムの格子をコード化する。言語地図作成のほか、社会言語学での利用、また、方言分布のタイプについての研究に有用な、フィールド言語学にコンピュータを利用した技法を取り入れた。

これと似た言語地図作成法が、英国で言語地図作成プログラムのSYM VU(ハーバード大学のコンピュータグラフィック実験室で開始された)があり、これを使ってWelsh方言資料を分析したAlan R. Thomas(1980)の論文がある。^{xxxi}

^{xxx} 岸江・木部・石田(2002)「声の言語地図」, 日本語学 21-11, 9月号(明治書院)参照。

^{xxxi} Alan R. Thomas(1980), Areal Analysis of Dialect Data by Computer, Cardiff Univ. Of Wales Press.

2) ボーリング言語地図



〈図 2〉 高橋顕志氏のグロットグラム地図(「ぬすくる」の分布)^{xxxii}

高橋顕志氏がグロットグラム分布図を言語地図上に図示化した地図である。一種の「言語地層学」或いは「言語層位学」とも呼ばれる方法だ。平面地図に言語分布を描くと言っても、複雑な言語変化の姿をそう明確に明らかににはできない。あたかも地質学で地面に穴を掘って何層にも重なった地層を比較して地質変化の過程を説明するように、ある地点の一話者のみを調査の対象にするのではなく、世代が異なる、何層かの話者を対象にしている。それを横軸に地点、縦軸に年齢を配してグロットグラム(地域×年

^{xxxii} <http://kenz.linguistic-atlas.org/chus/21/2121m3.htm> より転載。

齢)分布図のように表現する方法を、「ボーリング地図」という。このボーリング言語地図は、方言分布の歴史的説明のための表現方法で、言語地図が平面図ならグロットグラムで描かれたボーリング言語地図は単層図と言えるだろう(高橋:2002b)。

ボーリング言語地図は、白地図に方眼紙のように構成された格子を配し、各地点に言語の分布を描く。この方法では、実際は2次元の表現方法だが、その複雑な重層の情報を乗せることができる上、インフォーマントの情報を百分率で計算して表示する頻度数(%)グロットグラムの方法も提案している。

「ボーリング言語地図」という表現法は、社会言語学の理論とも密接な関係にあり、GISによる地図化方法と結び付いて発展してゆくだろう。これと似た方法で、言語出現の品度数を言語地図に反映させ、その変化過程を論じた英国の John Ambrose (1980)の研究があるが、氏は言語変化の推移を説明するために、半径の大きさで頻度数を反映した言語地図や地形図(Topography)と、キャットグラフを使った言語地図作業等、さまざまな地図を紹介している(John Ambrose:1980)。

3) 国立国語研究所の LMS プログラム

国立国語研究所(2002)『方言文法全国地図』(GAJ)の5巻から、全面的に言語地図化過程を電算化したことはすでに述べたとおりであるが、もう少し説明を敷衍しておきたい。GAJ は、地図と文字、そして方言形式の記号を表示させるため、レイヤーを何枚も重ね合わせて、地図を作る方法である。この方法には、基本的に描画ソフトである Adobe 社のイラストレーターが使われている。^{xxxiii} イラストレーターに独自で開発した LMS(Language Map System)というプラグインを組み込み、各地点に方言形を表す記号が自動的に配置されるよう、言語地図作成の自動化を図った。

ドロー(draw)系の代表的な画像ソフトであるイラストレーターでは、画像全体がレイヤーと各レイヤーのオブジェクト(白地図、地点、記号、色、文字等)の組み合わせで構成されている。透明な OHP シートのようなレイヤーを、何層にも重ねて作った絵のようなものである。イラストレーターは、各ファイルの中でも記号や色等に名を付けて管理する機能、スイッチでコード化することができる。この機能を使って言語地

^{xxxiii} 大西拓一郎(2002)「言語地図作製の電算化」日本語学 21-11, 9月号(明治書店)参照。

図を電算化する方法は、「地点コード」と呼ばれるテキストオブジェクトを与え、それを各地図が必要とする記号に置き換える。そうすると、言語地図が出来上がる仕組みとなっている。このような機能を持っているのがプラグイン `lms.aip` で、このプラグイン機能を持ったプログラムが LMS である。

プラグイン LMS を使用する際に、白地図での地点コード作成と保管過程が重要だ。白地図には、調査地点にテキストオブジェクトを組んでおく必要がある。GAJ では本来、各調査地点に調査地点番号という 6 桁のコード情報が用意されているが、数字と英字を組み合わせた 36 進法 2 桁 (0, 1, 2, 3...a, b, c...x, y, z の順に 2 桁で組み合わせる) に従って調査地点番号の順序で地点コードを決めていく。記号は、GAJ の場合、イラストレーターのデータで作った基本的な記号は、予め決められている。

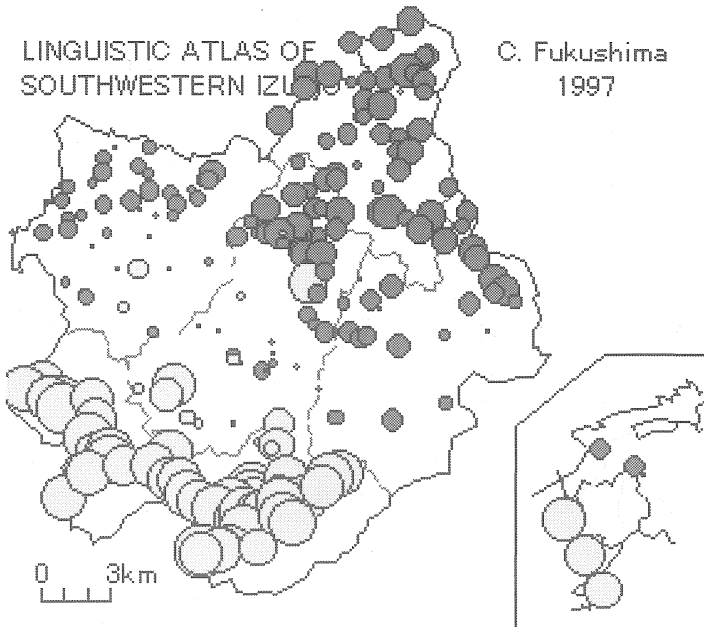
白地図と記号のセットを利用した地図化の手順に沿って、言語地図が作られる。LMS プログラムで作った地図はカラーの大型版なので、そのまま論文等に引用するのは難しい。そのため、標題を簡略化した地図に直すために CSV ファイルのデータを使い、標題を統合・捨象する。イラストレーターはそれぞれ画像ファイルでのプリントアウトができるようにサポートされている。例えば、jpeg や gif 形式でブラウザから閲覧が可能で、PDF ファイル形式なら自由にダウンロードもできる。

全面的に電算化された GAJ は、研究室レベルでも解像度が高いプリントアウトが可能で、作成された地図をそのまま印刷所に持って行けるようになった。

4) SEAL

1983 年に福嶋秩子・福嶋祐介両氏がパソコンで作動する言語地図作成システムを開発して以来、何度も修正補完され、現在 GUI (Graphical User Interface) ウィンドウズ XP で動くレベルにアップグレードしている。パソコンを活用して方言データを処理・分析し、言語地図まで作成できる、非常に有用なプログラムである。2003 年の段階で、SEAL6.2E 版が英語版ウィンドウズで使えるようになり、今後も他国の言語資料処理が可能な方向へアップグレードするだろう。このプログラムは、国立国語研究所の LMS と異なり、さまざまな言語地図と精密な記号が自由に描き込み、語彙実現頻度を反映させた解釈地図 (Interpretative Map) も描ける。このような点が高く評価されているプログラムである。

2003年4月7日に SEAL6.3E 版へグレードアップしたが、これにはハングル方言資料が転写できるように、3つの文字を追加登録した。従って、SEAL でハングル方言資料の精密な転写が可能になった。この SEAL を韓国方言資料が処理できるシステムに変えた KSeal (Fukushima, T/Fukui, R/Lee, S.G) を今年7月末頃に公開した。



< 図 3 > 福嶋秩子氏の SEAL^{xxxiv}

^{xxxiv} <http://www.unii.ac.jp/~chitsuko/inet/lg0j.html> より転載。

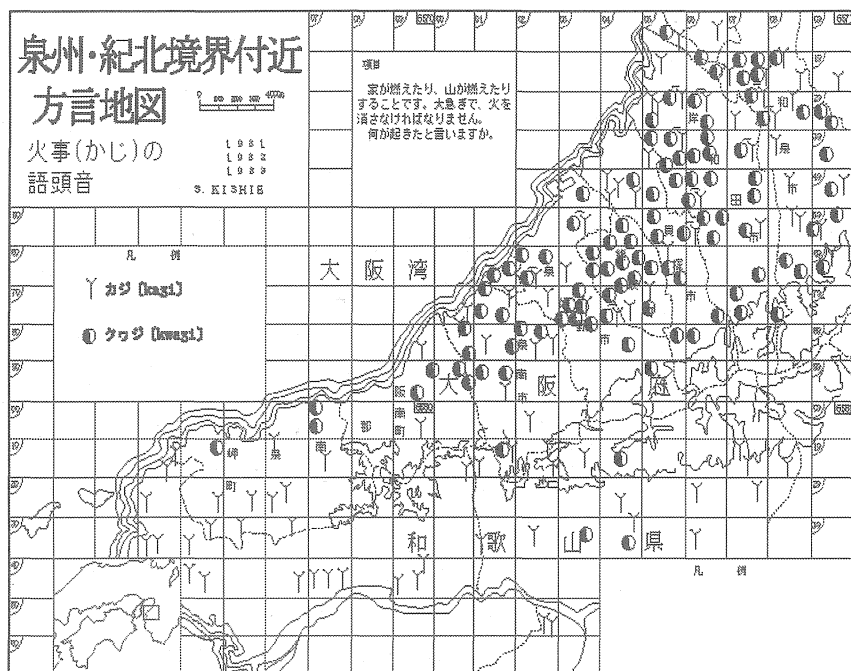
5) 音声言語地図

電算化で作られた言語地図上に、各地の記号（言語形式を記号化したもの）と同時にインフォーマントの生の音声を提供してくれる音声付言語地図が考案された。音声言語地図は、岸江信介の研究室を中心に開発されたものである。

音声言語地図とは、パソコン画面に作成された言語地図の上の言語形式を示す記号をクリックすると、現地調査で得たインフォーマントの発話音声をリアルタイムに聞くことができるという点に特徴がある。音声言語地図作成には市販のソフトが利用され、また、従来の言語地図に音声情報も加えるという方法である。

エクセル 2000 と Filemaker Pro5.5、Acrobat 5.0 といった、既製のソフトを利用し、①データ入力、②記号フォント作成、③記号への転換、④白地図作成、⑤Filemaker Pro に新規ファイル作成、⑥PDF 化とフォントのプログラム過程を経て地図化し、更に Acrobat のリンクプロパティを使って PDF ファイルの言語地図記号、一つ一つをリンクツールで囲い、記号ごとに音声ファイルと繋げていって完成させる。

音声言語地図は、音声コーパスプロジェクトと良く似ているが、調査の精巧性、資料の処理過程においてかなりの違いがある。音声言語地図は、研究者自らが誰でも作成できるほか、資料自体、特に調査時に記述された回答形式とインフォーマント自身が調査時に発した音声に焦点が置かれ、それらが合致しているかどうかといった点に焦点が置かれている。一方、音声コーパスは検索をメインに言語情報処理を行う過程を重要視しており、両者は全く別な目的で作られている。音声言語地図作成は、未来の方言研究のために、新しい方向を示している。特に、音声を地図の位置と対照させながら確認することができるので、今まで明らかにならなかった違いや変化の過程が発見でき、音声自体を言語地図上に埋め込んで、音声コーパスが構築できるというメリットもある。更に、音声の言語地図は、作成が簡単で自分でデータを増補することができるため、分限の利用可能性を持っている。つまり、今後、GIS のようなプログラムを活用して、多次元の立体的な言語地図が構成できる方向を提示しているのである。



< 図 3 > 岸江信介の方言地図

以上のように、言語地図作成をパソコンで行うことが可能になったことによって、研究者たちが言語地図を使って論文を書く際の大きな障害となってきた、言語地図作成と論文の掲載手段などの問題も今後解消できるはずである。今後、さまざまな言語地図を使って、研究の活性化が期待される。

だが一方、研究者ごとに各人各様の言語地図作業が齎す問題点も少なくない。まず、研究者ごとに方言研究本来の目的ではない言語地図作成システムを構築、或いは各々が独自に活用することは非経済的であるといわざるを得ないであろう。次に、研究者ごとに構築した言語資料のデータを相互に活用する際、互いにサポートができるのかどうかという互換性の問題もある。これら以外にも、使用する転写記号や色等、統一されていないので、効率性という問題も挙げることができるだろう。

3. まとめと今後の展望

上で見てきたように、最近では、言語地図を言語地理学の目的にだけに終始するという観点から脱し、社会言語学的研究にもその用途がみられるようになり、その効率性や生命力が非常に大きくなっていることが確認できる。言語地理学の目的は、言語分化の推定をはじめ、言語史再構成の論理的な解釈の一手段だと考えられてきたが、今や言語地図化それ自体が、新たな論理的解明を行う一つの方法になったと言ってもいいだろう。

これから言語地図は、単純な2次元的なものではなく、3次元以上の言語地図へと進化してゆくだろう。例えば、音声データがサポートされる言語地図や、又は地形図、即ち山脈や河川等の人文地理学の情報がサポートできる言語地図形式等である。

その方向は、GIS を目標とした言語地図データのインフラが整備されねばならず、最低限は経度、緯度のような地理的情報も共有できるように統一されるべきであろう。言語地図の情報と組み合わせたりする等(例えば、山脈、交通網、海路、赤道等に行われたとしても粗末だった)、さまざまな角度からの分析が可能になり、将来には方言資料分析シュミレーションも期待される。GIS システムを使った言語地図も電算化が実現できれば、時間と空間、そして社会言語学的なさまざまな要因を全て多次元の空間の中に演出することができるようになる。

しかし、言語地図作成システム開発が各国や各研究者の研究室単位で進められてゆくことで、人的、経済的浪費が懸念されることは残念なことである。漢字処理問題が解決された、より有用なプログラムを標準化し、まずは日・韓・中三国が共用化できる言語地図作成プログラム開発のために、努力が必要であろう。

この三国は、歴史的に漢字文化圏に属し、今後、共同で活用できる言語地図システム標準化のための作業を統一化することによって多大なシナジー効果を得ることができるだろう。このような点で、日本は国内プロジェクトだけでなく、三国間の学術交流を先導し、開発された技術を積極的に伝え、推進してほしい。

韓国国立国語研究院では、国際学術会議や国家間で学者たちの交流等を通して、共有化が可能な標準化された、国際的な言語地図製作の方法を提起してくれるよう期待する。

4. 参考文献

- 岸江信介, 中井精一, 鳥谷善史, 石田祐子(2000) 「エクセルとファイルメーカープロ를
利用した言語地図の製作-『徳鳥県言語地図作製』を例として-, 大阪樟
蔭女子大学日本語研究センター報告, 第8号
- 岸江信介, 中井精一, 鳥谷善史(2001) 大阪府言語地図, 近畿方言研究会
国立国語研究所(2002) 方言文法全国地図, 第5集, 財務省印刷局
- 真田信治監修(2006) 日本のフィールド言語学(4) - 新たな学の創造に向けた富山か
らの提言-(日本海総合プロジェクト), 桂書房
- 高橋顕志(2002a) 「情報化時代の方言学」, 21世紀の方言学, 日本方言研究会編,
図書刊行会
- 高橋顕志(2002b) 「ボーリング言語地図-グロットグラム(地域×年齢)分布図-」,
日本語学 21-11, 9月号, 明治書院
- 徳川宗賢(1993) 「電子計算機の「言語地図」への作成適用」, 方言地理学の展開, ひつ
じ書房
- 富山大学人文学部日本語学研究室(2001) 富山言語動態地図
- 中井精一, 坂口直樹(2000) 「データベースソフトによる富山県言語動態地図の製作に
ついて」, 富山大学人文学部紀要, 第33号
- 中村和郎, 寄藤昂, 村山祐司(1998) 地理情報システムを学ぶ, 古今書院
- 福嶋秩子, 福嶋祐介(2001) パソコンによる言語地理学: その方法と実践 SEAL ユーザ
ーズマニュアル第5版, 科学研究費報告書
- 김덕호(2002) 경북방언의 지리언어학, 월인
- 두길수·안동원(2002) 「한국어방언검색 프로그램 개발」, 한국어와 정보화, 태학사
- 이기갑(1994) 언어지도 작성 방법, 인문과학 10, 경북대 인문과학 연구소
- 이상규(1995) 「조선어연구부편, 방언집 검토」, 방언집, 모산학술연구소
- 이상규(1996) 「언어지도의 상징부호에 대하여」, 대구언어학회
- 이상규(1997) 「존대형태소 '-시-'의 두 가지 기능」, 어문론총 31, 경북어문학회
- 이상규(1998) 「계열어의 방언 분화 양상」, 추상과 의미의 실재, 박이정
- 이상규(1998) 「동남 방언」, 새국어생활 8.4, 국립국어연구원
- 이상규(1991) 「경북 방언의 경어법」, 새국어생활 1.3, 국립국어연구원
- 이익섭(1979) 「강원도 영서지방의 언어분화」, 진단학보 48, 진단학회
- 최학근(1958) 「언어지리학의 방법과 성질」, 동덕학보 1, 동덕여대
- 최학근(1958) 국어방언학서설, 동학사.

Alan R. Thomas(1980) Areal Analysis of Dialect Data by Computer, Cardiff Univ.
of Wales Press.

- Fukushima, Chitsuko(1983a) "Pasokon niyoru Gengo-chirigaku eno Apuroochi (An Approach to Linguistic Geography Assisted by a Personal Computer). (SEAL User's Manual)", Private edition.
- Fukushima, Chitsuko(1983b) "Izumo ni okeru kaion-rui no bumpu to sono soogooka : Pasokon niyoru Gengo-chirigaku no ichire tosite (Geographical Distribution of the Forms Related to the Old Vowel [au] and Its Synthesization : An Example of Linguistic Geography Assisted by a Personal Computer)", *Tokyo University Linguistic Papers* 4 : 103-10.
- Fukushima, Chitsuko(1995) "Tokunoshima ni okeru shinzoku-meisho (Kinship Term in Tokunoshima)", *Tokyo University Linguistic Papers* 14 : 339-57.
- Fukushima, Chitsuko(1997) "Standardization in England Based on the Morphological Data of CLAE." In : Viereck and Ramisch(1997) : 51-56.
- John Ambrose(1980) "Micro-scale Language Mapping : An Experiment in Wales and Brittany". Discussion Papers in Geolinguistics 2. North Staffordshire Polytechnic Dept. of Geography and Sociology.
- Viereck, Wolfgang, in collaboration with Heinrich Ramische(1991) *The Computer Developed Linguistic Atlas of England* 1. Max Niemeyer Verlag, Tuebingen.
- Viereck, Wolfgang and Heinrich Ramische(1997) *The Computer Developed Linguistic Atlas of England* 2. Max Niemeyer Verlag, Tuebingen.

【追記】

本稿は、李相揆 (이상규) による原著論文「일본의 방언 연구 동향과 전망 (日本における方言研究の動向と展望)」(韓国方言学会『方言学』第13号(2011))を瀧口恵子が日本語に翻訳・再構成し、岸江信介が校訂したものである。